

図2-6-34 豊岡盆地地質図および地質柱状図

### 11. 相楽丘陵

相楽丘陵は京都府相楽郡木津町および加茂町に属し、山城盆地と奈良盆地の接合点に当る。その

表2-6-11 相楽丘陵の地質層序

地質時代	地層	
完新世	沖積層	
更新世	中位段丘堆積物	
	高位段丘堆積物	
	大阪層群	市坂砂泥互層
		下梅谷礫層
上梅谷砂層		
鮮新世	ソノハ礫層	

の主部は東西 3 km, 南北 2 km である。

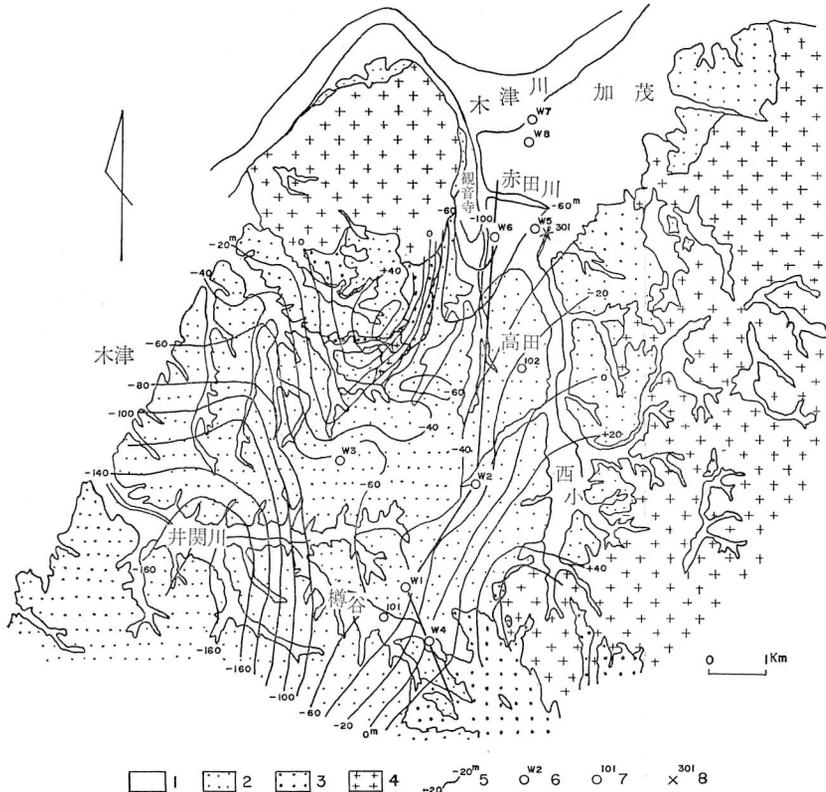
丘陵は標高 100 m 前後で、丘陵を刻む水系は木津川支流の赤田川および井関川であり、それらの沖積面の標高は 30~50 m である。

山地は主として花崗岩と片麻岩で、一部に古生層のホルンヘルスがある。丘陵の構成地質を表 2-6-11 および図 2-6-35 に示す。

先大阪層群はソノハ礫層と呼ばれ<sup>(3)</sup>、厚さ約 50 m で、主に中礫チャート、ホルンヘルス、石英斑岩の礫からなる。いわゆる山砂利層と呼ばれているもの

に当り、鮮新世のものとされている (図 2-6-35)。

大阪層群は厚さ約 250 m で、それらは上梅谷砂層、下梅谷礫層、市坂砂泥互層と呼ばれている。



1. 沖積層 2. 段丘堆積物および大阪層群 3. ソノハ礫層、西小礫層 4. 花崗岩および古生層 5. 重力探査による基盤等高線 (E L, m) 6. 深井戸 7. 浅井戸 8. 地表水水質調査地点

図2-6-35 相楽丘陵基盤等深線図 (重力探査による) (清水・川崎<sup>(3)</sup>による)

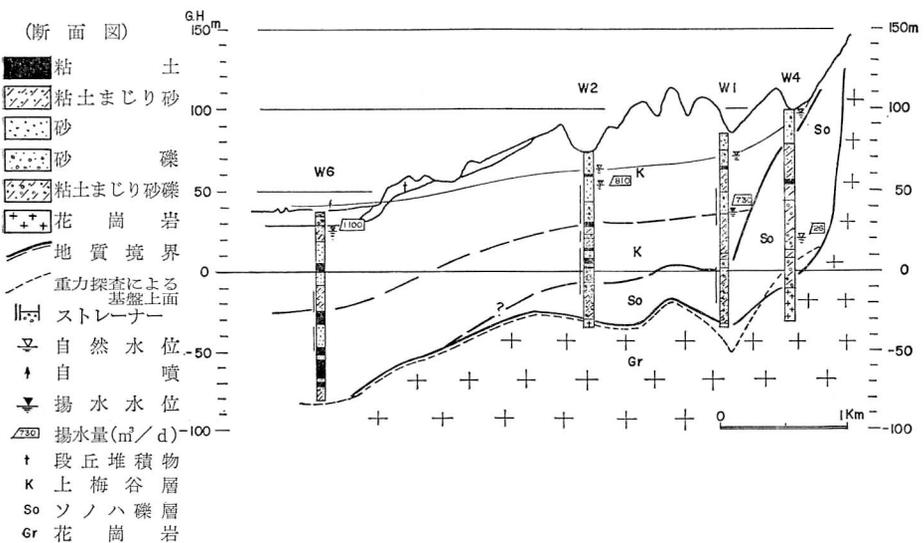


図2-6-36 相楽丘陵地下構造断面図 (清水・川崎<sup>(3)</sup>による)

W2の深度48~50m, 71.5~73mの大阪層群の花粉分析の結果と火山灰層序の検討より, 相楽丘陵の大阪層群は大阪層群下部であると考えられる(図2-6-37)。

段丘堆積物には, 高位段丘と中位段丘のものが識別される。

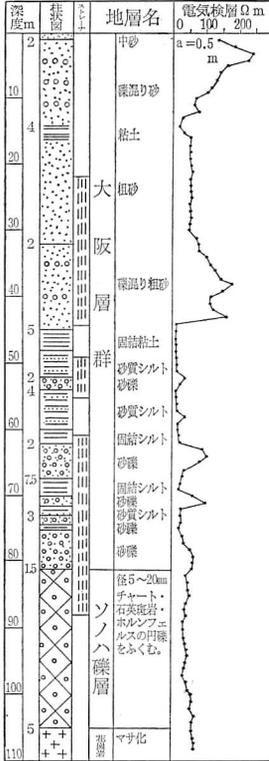


図2-6-37 W2柱状図

揚水量は 26 m<sup>3</sup>/d と小さい。ソノハ礫層は比較的良好に膠結されているため難透水層と考えられる。

水質分析の結果(図2-6-38)をみると, さく井W3, W6, W7は, 地表水301に比べアルカリ度とNaの濃度が高い。浅井戸101ではSO<sub>4</sub>, NO<sub>3</sub>が, また浅井戸102ではNaClがきわめて高い濃度を示している。

(清水欣一)

参考文献

- (1) 粉河昭平 (1954): 奈良三笠山附近の地質——特に火山活動の年代について, 地質雑, Vol. 60, No. 710
- (2) 近畿農政局 (1976): 農業用地下水調査開発調査相楽地区調査報告書
- (3) 清水欣一・川崎 敏 (1976): 京都府相楽丘陵の水理地質, 応用地質 Vol. 17, No. 2, p. 11~17
- (4) 清水欣一: 地下水盆の安全揚水量を試算する簡便な方法, 陸水, Vol. 42, No. 3, p. 123~130

12. 丹波高原

京都府船井郡一帯の, いわゆる丹波高原と呼ばれる地域には, 樹枝状の谷底平野が広がり, 低

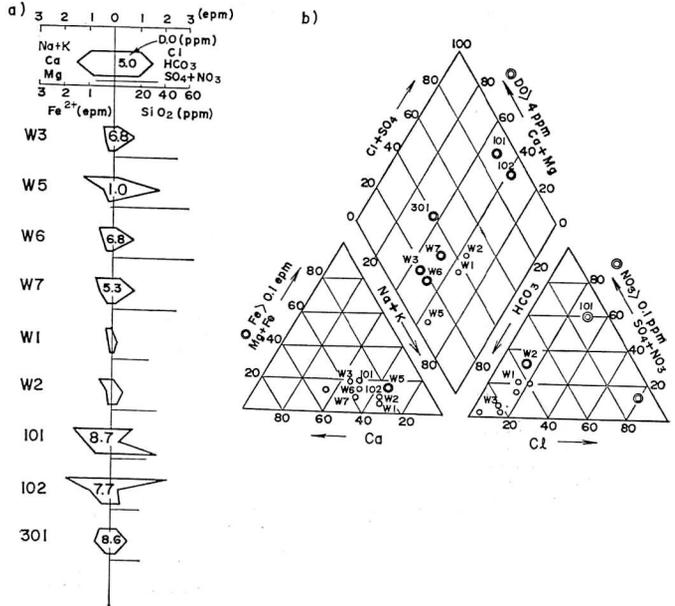


図2-6-38 相楽丘陵水質組成図

相楽丘陵の地下水について, いままでほとんど明らかにされていない。110~120mの深井戸の揚水量は700~1,000 m<sup>3</sup>/dであるが, 大阪層群が薄く, ソノハ礫層の厚いところでは,